

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02652

研究課題名(和文) 中国浙江講唱文藝研究 勸善・免災の機能から考える

研究課題名(英文) A Study on the Narrative Arts of Zhejiang, China: Mainly Considering the Functions of Exhortation to Good Deeds and Disaster Relief

研究代表者

松家 裕子 (MATSUKA, Yuko)

追手門学院大学・基盤教育機構・教授

研究者番号：20215396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国の江南地区、とりわけ浙江における、近世以来、現代までの講唱文藝(語りもの)について、「勸善」と「免災」の機能に重点を置いて分析と考察を行なった。調査の対象は、宝巻をはじめとするテキスト(文献調査)と、これらをうたい語る藝能または宗教儀礼(フィールドワーク)とし、具体的には、「紹興宣卷」(松家)、「温州鼓詞」(磯部)そして目連の物語り(小南)について成果を発表した。これらはいずれも人々の免災への強い希求に支えられてきたが、一方、テキストを育てた場はそれぞれに異なる。同じ韻文・散文の交代の形式をもつテキストの背後に、複雑で多様な世界が広がることを、その具体的な状況とともに説明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の講唱文藝を調査して上演状況とテキストとの関係を知ることは、過去の講唱文藝のテキストの研究に示唆や判断の根拠を与える。テキストだけに拠ると、議論は往々、「あれかこれか」の単純なものになる。儒家的あるいは中国共産党的な価値観によって宗教面の実態が把握しにくくなっていることも、混乱や誤解の誘因となる。じっさいには、講唱文藝は世俗的であると同時に聖性を有し、厳肅な宗教儀礼でありつつ娯楽でもありうる。本研究は、とりわけ本国の中国で学術研究が不足または欠如している講唱文藝を調査したこと、そしてそれらを生んだ世界の多様さ複雑さにことばを与えたことに意義があると考えている。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes and discusses the Narrative arts in the Jiangnan area of China, especially in Zhejiang, from the early modern period to the present, focusing on the functions of "exhortation to good deeds" and "disaster relief". The subjects of the research were texts such as Baojuan or precious scrolls (literature survey) and the performing folk arts or religious rituals that recite these texts (fieldwork). Specifically, we present the results of our research on "Shaoxing xuanjuan" (by Matsuka), "Wenzhou guci" (by Isobe), and the story of Mulian (by Kominami). While all of these texts have been underpinned by people's strong desire to be exempt from disaster, they have been nurtured in different places. We explain the complexity and diversity of the world behind the same alternating rhymed and prose texts, as well as the specific circumstances in which they were created.

研究分野：中国文学

キーワード：宝巻 宣卷 語りもの芸能 紹興宣卷 温州鼓詞 目連 勸善 免災

## 1. 研究開始当初の背景

研究課題名中の「講唱文藝」は、語り(講)とうた(唱)による文藝の意で、日本の語りものに相当する。本研究グループは、「宝巻」を中心に、講唱文藝のテキストの文献調査を行なうとともに、現代に生きるこの形式の藝能あるいは宗教儀礼について、磯部が1990年代から重ねてきた調査を基礎に、中国浙江省の紹興、平湖、金華、温州において実地調査を行なってきた。

2008年度、実地調査開始当初の松家の認識は、「宝巻は唱導文藝であるが、また世俗化して娯楽としての性格をもつものもある」、「現代中国においても、宝巻をうたい語る娯楽あるいは宗教儀礼『宣巻』が行なわれている」という程度のものであった。しかし、紹興において宣巻の実地調査をすると、宗教儀礼であるはずが厳肅さに欠ける、奉納する神仏と宝巻の内容が合わない、世俗化しているようだが聴衆がいない、にもかかわらず高額な謝礼を支払って宣巻が行なわれ、神仏への敬虔さもときに垣間みえるなど、単純な認識では説明のつかないことがらに多く出会った。混乱しながら調査を重ねようやくたどりついたひとつの仮説が、「宣巻は横死した人間の魂、すなわち孤魂を慰め、それによって『免災』を実現するという機能をもつと考えられている」ということであった。

一方、文献調査から、特定の宗教の唱導という性格を失って世俗化したとみえる宝巻が、「勸善」の機能をもち(磯部による『花名宝巻』の研究)その善への希求が強い宗教性を帯びるものがあること(松家による『惜穀宝巻』の研究)ことがわかった。宝巻だけではなく、「金華道情」など他の講唱文藝にも、勸善の内容をもつ演目が見いだされた。

中国巷間にいまでも「善には善報有り、悪には悪報有り」という一種の思想が普遍的にあるように、「勸善(よいことをすれば)」と「免災(災いに遭わない)」とは強くつながりをもつと意識されている。

こうしたことから、「勸善」と「免災」という機能に注目して、講唱文藝のテキストの読み解きと、上演についての理解を進めようと考えようになった。これらのキーワードは、勸善が善の思想に、免災が目連戯にそれぞれつながるから、講唱文藝をこうした中国文化史の大きな問題に関連づけて、捉えることができるのではないか。目連の物語りは本研究グループの小南が長年にわたり通時的な研究をつづけているテーマであり、目連戯については田仲一成の、善については酒井忠夫・夫馬進らの充実した研究がある。国際的にも評価の高い日本語による成果が、研究を後押しすることも期待された。

なお、講唱文藝の研究状況について、中国において、このジャンルは思想宣伝の媒体として価値が重視され、調査は行なわれても、学術的な研究が不足あるいは欠如している状態がつづいてきた。とりわけ宗教性をもつ宝巻の研究などは、ほとんど行なわれず、むしろ日本の澤田瑞穂や欧米の Wilt L.Idema、Daniel L.Overmyer など、中国以外の研究者によって牽引されてきた。近年は、中国でも宝巻の研究者や成果が増え、また、各地の講唱文藝も、とりわけ「無形文化遺産」の保護が謳われて以降、調査の成果が少しずつまとめられている。ただ、いずれについても、調査・研究はいちじるしく不足している。本研究グループが浙江で調査を行なってきた「紹興宣巻」、「温州鼓詞」、「金華道情」、「平湖鉞子書」は、いずれも中国の大学における研究者をもち、藝能者が高齢化する中、本格的な学術調査や研究はほとんどあるいはまったく行なわれていない。これらは著しく不利な状況であるが、またこのことが、中国へ調査に赴き、研究を行なう強い動機のひとつにもなっている。

## 2. 研究の目的

本研究は、「1. 研究開始当初の背景」で述べた経緯および意図から、「勸善」と「免災」という機能に注目し、中国近世以降、現代にいたるまでの、浙江を中心とする江南地区の講唱文藝について、個別のテキストにたいして正しい解釈を施したり、個別の上演やそこに見られる事象にたいして正しく理解をしたり、また各種の講唱文藝あるいは講唱文藝そのものにたいしてより整合性のある説明をつけることを目的と定めた。

中国では、かなり古い時代から、地方ごとにおびただしい種類の講唱文藝が行なわれてきたと考えられる。講唱文藝はその営み自体に価値があるとともに、『三国志通俗演義』や『水滸伝』によって（そして日本では『平家物語』によって）よく知られるように、文学作品を生み出す母胎として、中国文化史上、大きな役割を果たしてきた。

しかしながら、過去の講唱文藝の実態を知らせる記録はほとんど残されていない。本研究グループの大きな目的は、現代中国になおも生きる講唱文藝を実地に観察・記録して、文字として残されてこなかった中国の講唱文藝のありようをうかがい、それを、テキストのより正しい読み解きに生かすとともに、講唱文藝を中国文化史のなかに正しく位置づけることにある。本研究の3か年は、講唱文藝の「勸善」と「免災」という機能の面に注目して、この目的に近づこうとしたのであった。

## 3. 研究の方法

上述のように、本研究は、実地調査と文献調査とをひとしく重視し、それぞれの結果を相互に参照することを研究手法上の最大の特徴とする。したがって、研究の方法は、以下の3つが柱となる。すなわち、(1)浙江省の講唱文藝の実地調査、(2)講唱文藝のテキストにかかわる文献調査、(3)実地調査と文献調査の総合である。以下この3項目に分けて記す。

### (1)浙江省の講唱文藝の実地調査

2018年3月22日・23日、金華において金華道情の調査を行なった。内容は、藝能者へのインタビュー、本研究のための上演および一般のための上演の観察と記録、そして金華道情の作者であり研究者である章竹林さん（政府管掌の「文化館」に所属後、退職）へのインタビューであった。

2018年3月29日、紹興において、「玉釵宝巻」一巻の宣巻の一部始終を観察・記録し、あわせて藝能者への短いインタビューを行なった。

2019年8月28-31日、紹興において、紹興宣巻の調査を行なった。紹興宣巻に詳しい地元の幹部、紹興宣巻の往年の名人（故人）の直弟子H氏などにインタビューを行なった。また、H氏らのグループによる「循環宝巻」全巻の宣巻の一部始終を観察・記録した。このH氏に出会えたことは、とりわけ大きな収穫であった。往時を知り、高水準の藝を身に着け、また、みずからのことばで紹興宣巻を語ることのできる、稀有な情報提供者だったからである。

上記のほか、明清期の江南地方の歴史研究者として研究協力をお願いしている要木（藤田）佳美さんが、2018年3月24-27日、養蚕の一大拠点として知られる浙江省湖州において民間藝能、民間信仰などの調査をされた。

さらに、本研究の開始直前、本研究に先立つ科研費研究（題目：浙江金華口承文藝研究

語りもの藝能「金華道情」を中心に）の最終月にあたる2017年3月、磯部と要木（藤田）さんが温州に赴き、温州鼓詞の調査を行なったことを述べておきたい。この調査は、本研究の成果として磯部の3篇の論考に結実しているからである。

2020年1月から3月にも実地調査を予定していたが、新型コロナウイルスによる感染症蔓延のために行なうことができなくなった。この出張のために残しておいた旅費の用途を変更するに忍びなく、研究期間を1年延長したが、2020年度も実地調査の願いはかなえられず、報告書をすでにまとめていることから、2020年度をもって本研究を終えることとした。

実地調査では、藝能あるいは宗教儀礼として行なわれる語りものの上演の一部始終を観察すると同時に動画に記録し、許可を得られるだけテキストを撮影し、また時間の許すかぎりインタビューを行なう。一年に数回、数日ずつ行なうにすぎない調査であるが、毎回、新しい知見を得ることができ、本研究の3カ年を含む10余年のあいだに、テキストを生んだ多様で複雑な世界について、大小さまざまな知見が蓄積されている。

#### (2) 講唱文藝のテキストにかかわる文献調査

講唱文藝を広くみわたす文献調査は、小南が主導してきた。小南の研究は本研究(グループ)の理論的な支柱でもある。小南は、本研究における主たる研究対象を目連の物語りに置き、広い分野の資料を渉猟して、過去に公表した通時的な研究を改めてみなおし、補強する作業を行なった。

磯部の文献調査は実地調査と分かちがたくむすびついてきた。本研究においても、温州鼓詞の実地調査で得られたテキストの翻訳と分析・考察を中心に行なって成果を上げた。また、延長後の2020年度の仕事として、オンライン上に公表された資料を用いた講唱文藝の研究がある。これまで調査してきた金華道情など浙江省の藝能に、新型コロナウイルスによる感染症蔓延防止のための宣伝作品が多く生まれていることを発見、これを翻訳して分析・考察した。実地調査ができない時期の代替手段というにとどまらず、講唱文藝の勸善・免災の機能が、時代と状況の変化によって見せた様相を、新しい手法でいち早くとらえた注目すべき研究ということができる。

松家は、「勸善」と「免災」の要素が色濃く表れ、講唱文藝のこの機能に注目するきっかけとなった作品のひとつ、清末期の『惜穀宝巻』について、過去に公表した研究をみなおす作業を進めた。

#### (3) 実地調査と文献調査の総合

この作業は、代表者・分担者が論考をまとめるさい個別に行なっており、各研究成果の中に生かされている。

以上が本研究の方法とその具体的な報告である。研究協力者を含む4人のいずれもが、テキストの一字一句、目にした事象のひとつひとつを大切にしてきた。いうまでもないことかもしれないが、本研究グループの基本的な姿勢としてこの項の最後に記しておきたい。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、冊子体の報告書、松家裕子・小南一郎・磯部祐子・要木(藤田)佳美『中国浙江講唱文藝研究 勸善・免災の機能から考える』2020年3月としてまとめて刊行した。また、小南一郎『目連救母の物語り 孟蘭盆儀礼との関わりを中心にして(一)』および同『目連救母の物語り(2) 齋講から敦煌変文へ』が、本研究の報告書として別途刊行されている。

原稿をとりまとめていた2020年1月には研究期間の延長を予想していなかったため、上記4人連名の報告書は、当初の予定どおり2020年3月に刊行した。したがって、本研究には、延長後の2020年度に、磯部、松家各1篇の成果が加わった。

本研究の主要な成果は、小南による目連研究、磯部による温州鼓詞「靈經大伝」の研究、研究

協力者、要木（藤田）佳美さんの紹興における救荒研究、そして松家の紹興宣巻の上演におけるテキスト外のことばの研究である。

小南の目連研究は、目連の物語りの形成と変遷とを追い、第1冊、第2冊が本研究の報告書として刊行された。目連の物語りは中国文化史の一大問題で、小南のこの研究は将来にわたり長く広く参照されるものとなる。

磯部の温州鼓詞「靈経大伝」についての3篇は、温州鼓詞についての日本語による、おそらくはじめての論考である。温州鼓詞の上演がなされた祭り（廟会）は、多くの人が押しよせ、宗教と文学のみならず、聖と俗、古いものと新しいものが混然一体となった、息をのむような世界であったという。論考は、実見しなければ想像もつかない、そうしたテキストを育んだ「場」について記述するとともに、『香山宝巻』や『洛陽橋宝巻』の内容をも吸収した「靈経大伝」の大部分な物語りを翻訳して、丁寧に解説している。

報告書中の要木（藤田）さんの救荒研究は、松家の依頼にこたえて寄稿された。救荒は勧善・免災と密接にかかわる。この歴史方面からの研究によって、本研究の視野を広げることができた。

松家の紹興宣巻をめぐる成果は、上述のH氏の上演とインタビューで得られた情報やテキストにもとづく。H氏の語る往時の紹興宣巻は、勧善・免災の機能をもちつつ、娯楽性の強いものであった。

テキストでみれば同じくうた（韻文）と語り（散文）が交互に現れる形式であっても、テキストのむこうに広がる世界、あるいはテキストを生み育てた世界は、多様で複雑である。本研究はそれらを生んだ世界の多様さ複雑さにことばを与えたことに意義があると考えている。

なお、上述の冊子体の報告書の入手を希望される方は、松家 [matuka@otemon.ac.jp](mailto:matuka@otemon.ac.jp) 宛に請求をされたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松家裕子	4. 巻 2021年第3期
2. 論文標題 《惜穀宝卷》 一部晩清宝卷の文本和態度	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常熟理工学院学报	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部祐子	4. 巻 75号
2. 論文標題 浙江省における新型コロナウイルス禍下の曲芸	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松家裕子	4. 巻 -
2. 論文標題 宝卷の書面文本と口頭語言 試探紹興宣卷の挿花（宝卷の書面テキストと口頭のことば 紹興宣卷のアドリブ試論）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国宝卷学国際学術研討会・中国俗文学学会2019年会 会議論文集	6. 最初と最後の頁 4-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部祐子	4. 巻 70
2. 論文標題 「靈經大伝」小考(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 129-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部祐子	4. 巻 -
2. 論文標題 「靈経大伝」小考(3)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国浙江講唱文藝研究 勸善と免災の機能から考える (本科学研究費研究報告書)	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小南一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 目連戯 - その特異性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国浙江講唱文藝研究 勸善と免災の機能から考える (本科学研究費研究報告書)	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松家裕子	4. 巻 6
2. 論文標題 中国金華の語りもの芸能・金華道情の作家、章竹林さんについて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 (追手門学院大学) 基盤教育論集	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 磯部祐子	4. 巻 69
2. 論文標題 靈経大伝小考(1)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 105-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 要木(藤田)佳美	4. 巻 -
2. 論文標題 明末紹興における救荒について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国浙江講唱文藝研究 勸善と免災の機能から考える (本科学研究費研究報告書)	6. 最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 要木(藤田)佳美	4. 巻 -
2. 論文標題 湖州農村伝統社会・文化調査ノート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国浙江講唱文藝研究 勸善と免災の機能から考える (本科学研究費研究報告書)	6. 最初と最後の頁 114-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 小南一郎
2. 発表標題 目連戯 舞台上の活化石
3. 学会等名 説話・伝承学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松家裕子
2. 発表標題 宝巻の書面文本と口頭語言 試探紹興宣巻的挿花 (宝巻の書面テキストと口頭のことば 紹興宣巻のアドリブ試論)
3. 学会等名 中国宝巻学国際学術研討会・中国俗文学学会2019年会 (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 松家裕子
2. 発表標題 胡曉真「明清方志の文学解読」コメンテーター
3. 学会等名 台日明清研究交流合宿研習營（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 磯部祐子
2. 発表標題 清朝宮廷演劇の特徴と民間演劇とのかかわり
3. 学会等名 金沢大学社会人間研究域附属国際文化資源学研究中心東アジア古典演劇研究会「中国の古典演劇から見えてくる世界」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松家裕子
2. 発表標題 Berezkin Rostislav「現代常熟市《香山宝卷》的表演儀式与中国伝統女性文化特点（現在の常熟市における『香山宝卷』の上演儀式と中国伝統女性文化の特長について）」におけるコメンテーター
3. 学会等名 東文研セミナー
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 松家裕子、小南一郎、磯部祐子、要木（藤田）佳美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 川西軽印刷	5. 総ページ数 160
3. 書名 中国浙江講唱文藝研究 勸善と免災の機能から考える（本科学研究費研究報告書）	

1. 著者名 小南一郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 田中プリント	5. 総ページ数 192
3. 書名 目連救母の物語り(2) 齋講から敦煌変文へ	

1. 著者名 小南一郎	4. 発行年 2017年
2. 出版社 アインズ	5. 総ページ数 67
3. 書名 目連救母の物語り 孟蘭盆儀礼との関わりを中心にして(一)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小南 一郎  (KOMINAMI Ichiro)  (50027554)	公益財団法人泉屋博古館・学芸課(本館)・名誉館長   (84310)	
研究 分担者	磯部 祐子  (ISOBE Yuko)  (00161696)	富山大学・大学本部・理事・副学長   (13201)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	要木(藤田) 佳美  (YOGI FUJITA Yoshimi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------